

【From Kobe 2019年 弥生3月】春の足音が すぐそこに!!

弥生三月 どこかで春が生まれてる



老いを日に日に感じる世代ですが、新生の息吹きを胸一杯吸い込んで  
ひるまず前向いて 無理せず元気に今を

待ちかねた春到来 春の足音が すぐそこに!! 時代が変わる 平成31年の終わり

収録： 時代が変わる 新しい時代を生きる助けになれば -最近の新聞記事より-

財界の重鎮 小林喜光氏の視点に見る平成30年間

2019.1.30 朝日新聞朝刊 オピニオン欄 掲載記事

経済同友会代表幹事 小林喜光氏 <インタビュー>記事 転記ご紹介

「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」

いつもの散策の道 梅の花の香りがほのかに漂い、遠く見晴らす明石海峡も春霞。足元を見ると春の草花も咲き始め、庭に鶯もやってきて 初鳴き うれしい春の到来。揺れ動く激動の時代の中で、この春で平成の時代が終わり、新しい時代を迎えます

なんとかインフルエンザを乗り切ったと思ったら、早くも花粉症。後期高齢 老化を感じる歳になりましたが、お互い無理せず 元気に最近の世相を思いつつ、新しい時代の開始と若い人たちに期待一杯 老齡の我々にも脇から Follow の役割を果たさねばならぬと。

また、迫りくる老化や病気・困難に直面している人たちを思いつつ、  
God be with You!!

家族・仲間の笑顔を活力に我が道を行く。

2019.3.5. Mutsu Nakanishi from Kobe





弥生三月 どこかで春が生まれてる

老いを日に日に感じる世代ですが、新生の息吹きを胸一杯吸い込んで  
ひるまず前向いて 無理せず元気に今を

■ 春の到来と共に時代が変わる 新しい時代を生きる助けになれば ー最近の新聞記事よりー

1. 2019.1.30 朝日新聞朝刊 オピニオン欄 掲載記事  
経済同友会代表幹事 [小林喜光氏 <インタビュー>記事 転記ご紹介](#)  
「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」
2. 2018. 11. 29. 神戸新聞朝刊 指路 21 欄 掲載記事  
評論家 [内橋克人氏 <評論>記事 転記ご紹介](#)  
「安倍外交の実相 目立つ内外の食い違い 国を危うくする言いつくろい」

【From Kobe Mitsuo Nakamishi 2019.2.5.】 2019.1.30 朝日新聞朝刊 オピニオン欄 掲載記事  
経済同友会代表幹事 小林喜光氏 <インタビュー>記事 転記ご紹介  
「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」



2018. 11. 29. 神戸新聞(1・2面掲載)  
「針路21」欄 内橋克人氏評論 整理転載



平成の30年間 昭和の高度成長期から、グローバル化とIT高度情報化と成熟高齢化の社会が、並行して急激に進んだ時代だった。この時代 昭和の成功体験を持つリーダーたちが、日本を動かしてきた時代でもあった。

その後、激変ともいえる急速な社会展開の中で、従来の経験では対応できぬ国境を越えた高度情報化社会が形成され、もはや個々1国では制御できぬ時代に入っている。また、この間 地球の温暖化がもたらした気象環境の激変と活動期に入った地球がもたらした激甚災害の発生が追い打ちをかける。この国際社会全体を巻き込みつつ激動変化してゆく時代に、日本では日態依然一握りのリーダー層たちの成功体験に頼り切る薄っぺらな国際化・グローバル化と数頼みの利那の時代対応。何一つ太刀打ちできなかった日本。 今や出口の見つからぬ閉塞感漂う中で迎える新時代である。

地球の異変・社会の異常を誰もが身近に感じる時代に、我が身さえよければではどうにもならぬと。また、気が付けば、ひとり閉じこもっていても 誰も手を差し伸べてくれぬ厳しい現実。

この平成の30年 日本は敗北の30年だったと総括するリーダーもいる。

出口はあるのか・・・でも 新しい時代はやってくる。

30年間の総括反省の中で、新しい潮流 若者たちの力にも期待したい。

あの「辺野古の県民投票」を主導した沖縄の若者たちの考え方と行動はその一つか……

成功体験に縋りつくリーダーたちには早くリタイヤを願い、中央を若者たちに譲り、山住の諸問題と立ち向かって、この閉塞感を打ち破ってほしい。また、熟年高齢者も経験が生きるフォロアーとして、新しい生き方を切り開かねばと。色々考えねばならぬ時代替わり。手放しでは喜べぬ平成最後の春です。

また、この弥生三月 忘れてならぬ3.11.のこと

東日本大震災と原発事故そして さらに昨年も新たな自然災害が多発

被災者の皆さんの復興はまだ道半ば さらに自立支援・救済の手が差し伸べられますよう

政治はいまだに東京一極集中と大型プロジェクトにしか目が向かぬのか……………

負け惜しみは言うまい 技術立国日本の地位も今や東南アジアの諸国にも追い抜かれそうな現実直面している。

日本の今を見れば、原因は明らか この平成 30 年を動かしてきた政治の責任は極めて重い。

今 自らの次回も含め、年寄りも 若者も新しい道を踏み出さねば・・・

「自ら 替わろう 変えよう 日本を」と

春の到来を楽しんでばかりはいられぬ社会情勢に、なにかメッセージおくらねば..... と思うのですが、頭回らず。日頃づつづつの私の思いに近い2つの新聞記事が目にとまりましたので、新しい時代を考えるさんこうになればと本月のFrom Kobe としました。

1. **2019.1.30 朝日新聞朝刊 オピニオン欄 掲載記事**  
**経済同友会代表幹事 小林喜光氏 <インタビュー>記事 転記ご紹介**  
**「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」**  
<https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/2019mutsu/fkobe1903kobayashi.pdf>



1月30日朝日新聞朝刊に掲載された財界の重鎮小林喜光氏のインタビュー記事にびっくり。

小林喜光氏の熱い思いの発言に釘付けになった。

日本の現状に日本を牽引する財界トップリーダーの一人人とは思えぬ厳しい発言と指摘が並ぶ。

すべてがすべて、今後の道に必要とは思いますが、日本の現状や指摘・そして方向性には承服。ビックリする明快さ。

日本の社会の現状がおかしいと思いつつも、なかなか口にできなかったことが、ストレートに記事にされている。

それも、現状肯定一辺倒と思っていた財界人の口から.....。

私だけではないんだ。 思いは同じで、もやもやしていた思いがすっきり整理できて、気持ちがいい。

また、ちょっと視点がいつも重厚長大・製造業重視に偏る私の頭もガツンと....。

出口すら見えぬ課題山積の日本。 そして老害が蔓延する日本を端的に指摘するコメント。

さあ 日本はどう動いてゆくのだろうか...

ご承知の方も多いと思いますが、参考になればとできるだけ、記事を忠実に整理転載しました。

いつも勝手なことをぶつぶつ言う私にとっても反省と良い刺激となりました。

いうはずし。頭は回らぬが 好奇心・突き進む力もまだある。大勢に飲み込まれぬよう がんばらねば.....と。

2019.1.30. 朝日新聞 小林喜光氏インタビューの記事に接して from Kobe Mutsu Nakanishi



#### ◆ インタビュー記事のトップに記載された 小林喜光氏のプロフィール

1946年生まれ 相関理化学専攻 イスラエル留学などを経て

74年に、三菱化成工業(現三菱化学)に。2015年から経済同友会代表幹事

1946年、新進の企業人83人がつくった経済同友会。経済再建を誓った設立趣意書には、「全く新たなる天地を開拓しなければならない」「同志 相引いて互に鞭うち脳漿をしぼって」と熱い言葉が並ぶ。

以来70年余。同友会を率いる小林喜光さんの頭を離れないのは「日本が2度目の敗北に直面している」との危機感だという。技術は米中が席卷。激変に立ち遅れ 挫折の自覚ない。

#### ◆ 小林喜光氏 インタビュ記事 新聞掲載要旨 水色はインタビューの質問 ◆

2019.1.30. 朝日新聞掲載 小林喜光氏インタビュー 聞き手 編集委員・駒野剛 より

##### ● 平成の30年間、日本は敗北の時代だった 事実を正確に受け止めなければ 再起はできません。

今では、グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンという『GAFA』と、アリババ、テンセントなど米中のネット系が上位を占め、モノづくりの企業はほとんどない。日本はトヨタ自動車が四十数位で、そこまで差がついた。

企業の盛衰が反映する国のGDP(国内総生産)でも伸び悩む日本に対し、米中は倍々ゲームで増やしていった。テクノロジーはさらに悲惨です。

かつて『ジャパン・アズ・ナンバーワン』などといい気になっているうちに、半導体、太陽電池、光ディスク、リチウムイオンバッテリーなど、最初は日本が手がけて高いシェアをとったものもいつの間にか中国や台湾、韓国などに席卷されている。もはや日本を引っ張る技術がない状態です

##### ● 事実を事実として受け止めないから

「GAFAみたいな世界もすぐ追いつける」とのんきな気分ですらられるんでしょう。

そもそも失われた20年とか、デフレマインドの克服とかいうこと自体が本末転倒です。

安倍晋三政権、アベノミクスが唱えられ 「財政出動、金融の異次元緩和を進めるから、それで成長せえ」といわれました。しかし本来は時間を稼ぐため、あるいは円高を克服するために取られた手段で、それ自体が成長の戦略だったわけではないのです。この6年間の時間稼ぎのうちに、なにか独創的な技術や産業を生み出すことが目的だったのに顕著な結果が出ていない。ここに本質的な問題があります。

内閣府の2018年6月の調査でも74・7%の国民が今に満足していると答えています。

18~29歳では83・2%ですよ。

心地よい、ゆでガエル状態なんでしょう。日本全体は挫折状態にあるのに、挫折と感しない。

この辺でいいやと思っているうちに 世界は激変して 米中などの後塵を拝しているのに、自覚もできない。カエルはいずれ煮え上がるでしょう

##### ● 国家の未来図が描かれないままの政治が与野党含めて続いてしまったためです。

今さえよければ、自分さえよければ、という本音の中で、国民も政治家も生きてきた。

周りが敵ばかりのイスラエルや、覇権を維持するためには科学を前に進めなくてはならない米国などと違い、皆で楽しく生きていきましょうという空気が取り巻いて敗北を自覚しない。

運動会で「みんな一緒にテープを切りましょう」と競争自体を忌み嫌った時期もあった国だから無理もない」

##### ● 敗北が見える、自覚できる事態になると・・・

地政学では三つの選択肢がある。今は米国依存ですが、さらに従属を深めた米国の別種の州として生きていく。これを断ち切れれば、うっかりすると中国の一つの市、北京や上海になる形もあり得るでしょう。

どちらも嫌だ。日本は日本だと独立を守り、米中の間で中立を保つことも可能性としてはある

経済、技術を通じた地経学的な見地が死活的に重要です。現在は歴史的な革命期にあると皆が認識すべきです。

5GもAIもサイバーセキュリティーも日本は本当に遅れてしまい、基幹的な技術を欧米や中国から手に入れなければ産業、社会が立ちゆかなくなる。外国政府や企業の意向を無視しては国家全体が成り立たなくなる。リーディングインダストリー（成長を引っ張る産業）を自国の技術で育てることができず、他国の2次下請け、3次下請けとして食いつなく国になってしまう

● **抜け出すのも至難 息継ぎのために国債が乱発された結果、財政に余力はなく、持続可能性が疑問の現状**

GDPを増やそうとして逆に国内の総負債を増やしたんです。

6年間で約60兆円のGDPが増えたといいますが、国と地方の借金は175兆円も拡大しました。

これで次の世代に引き継いでいけるでしょうか。

一方で5Gや半導体、量子コンピューターなど次世代が利用する技術の研究開発費は欧米や中国に出遅れている。

● **アベノミクスに小林さんを含め、財界も手をさしのべた。結果的に時間稼ぎに加担した責任は軽くない ……。**

非常に問われている。矜持（きょうじ）を持つ財界人が少なくなりました

経営者として、あるいは社会的公器のリーダーとして、社会に対して強く関わって変革していこうという意志を持った人の絶対数が減ったんです。

● **かつて土光敏夫さんが臨時行政調査会を率いて行政改革を進めた頃、財界には高い権威がありました。**

でも ネット社会のいまは、財界トップと言っても、持っている情報が一般の社員と比べて特段に優れているわけでもないから、社会的地位も特段に高いわけでもない。そうした状況で、官邸1強体制の中、経済財政諮問会議や未来投資会議など政府の意思決定過程に組み込まれてしまえば、できることもたかがしれている

● **変えていくためには……………**

まずは財界トップに権威のない時代だと自覚する。だからこそ財界人だけで群れて固まらず、

学界や知識人、若い人たちも含めた幅広い団体、いわば知的NPOを作って意見を交わし、社会に問いかけ、政治に注文する。そういう柔軟な形でないと世の中は動かなくなっている。

まず知的NPOとして活動する場として、今度の大阪万博などは、よい機会になると思います。

お金集めなどはこの次です。世界に向けて何を考え、何を訴えるのか、それが本質です

● **日本の衰退が心配な半面、世界は一国主義や分断が広がっています**

一国主義を主張する政治家は選ばれた存在に過ぎず、選んでいるのは国民です。悪いのは国民です。

各国で国民が劣化したんです。偽りと真実を見極めることが民主主義の原点なのに、それができずに独裁者を生む。プーチン氏や習近平氏であり、西側でもそういう連中ばかりになってきた。

劣化は老いから始まったと思います。老いて勉強しない。考えない。新しいものに果敢に挑み、切り開くエネルギーも 枯渇してきました

● **先進国は老いたのですか……………。**

文明は老いるものです。ローマしかり、大英帝国しかり。新しい血と混ぜることを嫌えば衰退に向かう。

それが世界史です。トランプ氏が壁造りに躍起になっていますが、外国からいろんな人がやってきて 活性化してきたというエネルギーを馬鹿にしてはいけません。日本は「弱きを助け、強きをくじく」といった大和心は残しつつ、進取の気性を培わないと、挫折したまま滅んでしまう。単なる労働力として外国人を入れるのではなく、勉強する、考える日本人を増やす触媒の役割を担ってもらうべきです。

● **社会にはストレスが生まれませんか……………。**

だからいいんです。無用な対立はいけません。異文化と接することで日本本来の文化も磨かれる。

陳腐化したものは淘汰（とうた）される。そうした新陳代謝を怠ったのが、残念ながら平成時代の一つの性格です。異文化とワイワイガヤガヤやって実力がつくのです

---

2019.1.30. 朝日新聞掲載 小林喜光氏インタビュー 聞き手 編集委員・駒野剛 より  
できるだけ記事に忠実に転記整理させていただきました

2019.2.5. by Mutsu Nakanishi from Kobe

◆ 2019.1.30. 朝日新聞掲載 小林喜光氏インタビュー記事紙面 file

<https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/2019mutsu/小林喜光氏記事.jpg>



2. 2018. 11. 29. 神戸新聞朝刊 指路21欄 掲載記事

評論家 内橋克人氏 <評論>記事 転記ご紹介

「安倍外交の実相 目立つ内外の食い違い 国を危うくする言いつくろい」

<https://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf>

2018. 11. 29. 神戸新聞(1・2面掲載)

「針路21」欄 内橋克人氏評論 整理転載

「安倍外交」の実相

針路21

客員論説委員

内橋 克人



目立つ内外の食い違い

針路21

国を危うくする言いつくろい

時の政権にとって「首脳会談」は効果絶大なパフォーマンスの場である。安倍首相とトランプ大統領との会談はすでに8回、プーチン大統領とは3回に及ぶ。各国トップと親く握手を交わすシーンが国民の目につくにつれ、「外交の安倍」の重月ぶり、演出の成否は支持率に響く。

その安倍外交に際立つ「三つ」の特徴がある。まず高圧会談で何が話し合われ、何が会意されたのか、会談後に明かされる両首脳の発表に食い違いが目立つこと。日米通商交渉入りをめぐるトランプ氏の会談、北方領土返還をめぐるプーチン氏の会談、いずれも直後に明かされた会意の中身に両首脳間で隔たりが大きい。

第二にそれら外交パフォーマンスには手土産が用意される。9月末、国連総会後の記者会見でトランプ氏は「日本はすごい量の防衛装備品を米国から買っていく」と明かした。だが、安倍首相自身はいまだ黙して語らず。だが、第三に国会で重要法案審議中であれ、お構いなく足しげく海外に出向く。経産省首脳の大集団が、お供する「外交の安倍」は尚ほ主眼だ。冷静な経営が求められる時がきている。

国会の首相発言に合わせて事前準備を新しい言葉を駆使し、ねり出される。森友・加計問題では公文書まで捏造された。同じ手法は種々様々で、閣内閣外で常態化すれば、日本という国の信用が問われない。いま話題の日米通商交渉「スリ」は「物品協定」「TAC」なのか、それとも「自由貿易協定」「FTA」を指すのか。日本側で深まる認識格差が典型例といえる。

前者ならば農産物、工業製品など「モノ」の輸出入についての関係交渉であり、後者はそれ投資から流通、金融、通関、サービスなど広範囲にわたる包括的通商交渉となる。それを閣内閣外で日米交渉間で取り扱っているのだ。

今月13日の安倍首相と米白宮のペンス副大統領との共同記者会見。ペンス氏の発言をめぐって日本のメディアは錯乱した。同氏の発言を「TAC」と訳して報道したNHKニュースはさきま訂正を迫られた。「ペンス氏は「FTA」とはしていない」と日本政府は強弁する。

「Trade Agreement not on goods」、略してTAC。「日本製・造品」である。安倍首相が繰り返す「自由貿易協定」「FTA」とは全く異なる。この発言に合わせて「つくり出された。ちなみに記者会見でのペンス氏発言は「Bilateral Trade Agreement (2国間協定の意」というものだった。

しかし、同氏は来日前夜、自らのツイッターで「Free Trade Agreement」すなわち真正銘のFTA交渉がこれから日米間で始まるのだとツッパしている。

TACとは国内向けの通関あり、それをやりやり通せば、さらなる開港待ち構える。すなわち米国の「対日戦利品」が世界貿易機関(WTO)加盟国すべてに渡り寄ることになるからだ。WTO協定「第1章第1項」最惠国待遇の原則。いづれかの国に与える最も有利な待遇を、他のすべての加盟国にも与えなければならぬ、ということも。

唯一の例外規定がFTAなのであり、筆尾9月26日(日本時間27日)未明の首脳会談直後からそう指摘してきた(NHKラジオ、農協新聞10月1日号など)。A/P通関は日米のうちに「FTA交渉(日米含意)」と報じている。自動車への高関税措置の発動がトランプ流「スリ」の手裏剣だったという。

まずはTAC、次いでFTA。国内世論対策を真の狙いとす安倍外交の一段落分岐方式である。日米両国で「食い違いあり」となせて、その実、ひそかな「意」が形成されている、とも官邸筋は筆者に明かした。農産品での譲歩はもはや既定路線だ。

こうした「食い違い」はプーチン大統領との首脳会談においても顕著だった。

こうした「食い違い」はプーチン大統領との首脳会談においても顕著だった。

「日本の安倍首相が先提案してきたとプーチン氏は自由貿易協定を前に口にした。舞臺、魚舟2島の先行通関で合意した、というのだ。しかし、安倍首相はあくまで4島だ。2島先行通関は無い。方針は変わっていない」と強弁を続ける。

強烈な自己弁護と保身本能が一見、巧みな「言いつくろい」をひねり出すのか、国内内外で使分けの外交手法は国家的リスクを伴う。国民の「知る権利」と「安全保障の秘匿性」の両立をどう「ツナズル」の再確認が、日本国政府の緊急課題である。

(「ちほし・かつ」評論家)

「安倍外交」の実相 針路21

弥生三月 どこかで春が生まれてる  
 老いを日に日に感じる世代ですが、新生の息吹きを胸一杯吸い込んで  
 日々新た 今できることを精一杯 無理せずゆっくりと

「まあええか 元気だして行こう」  
 心は行ったり来たりですが、好奇心さえあれば・・・  
 God be with You!!

2019. 3. 5. 平成最後の春を迎えて From Kobe  
 Mutsu Nakanishi

